

今日十日丁卯時午、十三日時午、十六日時巳、

四月四日

刑部卿

〔後奈良院宸記〕天文四年三月十四日乙亥蚊帳新調初而ツルナリ、盃獻上、

〔柳亭筆記〕蚊帳に匂袋を掛る事并蚊屋釣初略○中

都曲元祿三年ねたましや伽羅たかぬわが蚊帳始水狐五元集中日にて蚊屋まゐりたり、夜はや

寐ん紙帳に風をいる、音其角十三歌仙芭蕉翁十三回南天に強飯のふたのはね返り、孟遠蚊屋

の祝ひに村のほめ言越闌草梅集元祿八年一晶撰雁がねや三隅釣たる蚊屋の縁賞花

〔用捨箱〕蚊帳に香袋を掛

蚊帳懸香袋

誰袖の條にいひし如く昔は香囊の類おこなはれて匂袋を蚊帳に掛し事あり、

鹿驚集 明曆三年印本

撰者 春清

つく花は匂袋歟蚊帳草

信親千句 明曆元年刻

前句 人知れぬ匂袋歟夏の風

後句 釣し蚊帳の内外くらき夜

懷子 萬治三年刻

床近み目に掛物を心にて

是等の句おほくあり、三句にして止

匂袋は蚊屋のすみぐ

常

撰者 重頼

是は高貴人の臥給ふまうけなるべければ今もさる事あるを予が知らざるにやあらん又おもふに赤鳥の巻に大島求馬の説なりとて昔は遊女にたはるゝを浮世狂ひとひしなり傾城の宅前には柳を二本植て横手をゆひ布簾をかけそれに遊女の名を書て下に三角なる袋を自分